

◎市史資料編「自然災害碑・石造物調査」2日目



昨日の線状降水帯が今日は一転、やや蒸し暑さは残ったものの、秋晴の快晴になった。下ノ加江地区五味と長野の2カ所に所在する自然災害碑2基の拓本を濱田・唐岩両市史調査協力員（市史執筆協力員兼任）が協力して取りました。石碑自体が大変大きく、これまで石仏等の小型の石造物を多く拓本を取ってきた両委員ですが、このような大きな石碑の拓本は初めてだったそうです。

この一帯は、下ノ加江川の近い所で、川上からの川風と川下からの浜風がよく吹きつける場所であり、拓本を取るには適した場所ではありません。また、今日はいにくの浜風で和紙が何回もめくれ上がりました。このような悪条件の中を二人で協力し、根を詰めて拓本作業を進めていただきました。作業が終わると、お二人は「本当に今日は疲れた」と、汗を拭き、車で家路（南国市）に就きました。本当に濱田さん・唐岩さんお疲れさまでした。

【下ノ加江地区・長野の自然災害碑】「劇力参天」(りくりよくさんてん)

長野に所在する水害碑の碑文と題字を書いたのは、溝渕素江(みぞぶち・そこう)こと、溝渕政次郎(みぞぶち・せいじろう)である。この溝渕政次郎は、『新市史・通史編』の第6章以南偉人伝で紹介する予定である。令和2年『市史編さん便り(第27号)』で既に紹介はしており、内容が重なることになるが、あえて再度、溝渕政次郎についてその人生の概観と地域への貢献を簡潔に紹介したい。

溝渕政次郎は、慶応二年(1866)、幡多郡伊豆田村(後の下ノ加江村)で田村森助、寿加の三男として生まれた。7歳の時、寺子屋に入り、漢学に興味を持ち、13歳で幡多中村(現四万十市)の医師・吉松純(1838~1908)に学んだ(註1)。

吉松純は、代々医師の家系であった。遠近恒齋に経書を学び、成長後に筑前国の亀井腸洲の門下として数年間修行し、更に京都岩垣松苗に学んだ。その後、中村に戻り、父より医術を教授された。洋学・漢学ともに精通し、多くの門下生を抱えた。政次郎は門下の中で頭角を現し、俊才との誉が高い弟子の一人であった(註2)。

その才をいち早く見抜いた当時・下ノ加江郵便局長・溝渕嘉三郎は、思う存分学問に専念させたいと、政次郎を自分の養子に申し受けた。これより溝渕姓となる。政次郎、14歳の春のことであった。養父・嘉三郎は下ノ加江・小方地区で文久の頃より寺子屋を経営し、30~40人の教え子を抱えていた。明治維新後、その実績を買われ、下ノ加江郵便局長に任命されたのである。

政次郎は、15歳のときに戸籍を18歳と偽り、教員検定試験に合格し、短期間教壇に立ったとのエピソードが伝えられる。その後、九州に遊学の旅に出たが、その途中2年ほどして病気となり、志半ばで帰省して療養生活を送ることになった。そのうち徐々に病気も快復に向かい、父が局長を勤める下ノ加江郵便局で政次郎は働くことになる。その後、昼間は郵便局に勤務し、夜間は村内の青年を集めて夜学校を始めた。これが後に「溝渕義塾」と呼ばれる私塾となった(註3)。

夜学で実施された授業科目は、漢文・国語・歴史などがあり、下ノ加江村の前途有望な俊才がここに通塾した。この塾は明治37年頃まで続き、通塾生には後年、村の吏員・村会議員など郷土に貢献した有益な人材となった。その後、政次郎は下ノ加江郵便局長となり、その見識の広さから幡多郡郵便局長会理事となる。女子教育の必要性を感じ、男女共学の私立青年学校を開校し、これに当時の村長橋本和三郎が共鳴し、村立「伊豆田村塾」として地域教育の拠点的な役割を果たした(註4)。

大正末期、政次郎の還暦を祝い、門下生有志が、「素江会」(政次郎の雅号が「素江」であったことから)を結成した。同会が昭和17年に発行した文集『溝渕素江先生』には、政次郎を「伊豆田聖人」と讃えている。この発行責任者には、大西正幹も名を連ねている(註5)。

政次郎の愛弟子・大西正幹は、幡多郡伊豆田村出身の弁護士であり、高知市議会議長や高知県議会議長を務め、大正14年の普通選挙法成立後初の昭和3年に行われた第16回総選挙にて立憲民政党から高知二区に出馬して当選した。ちなみに、同じ民政党から高知一

区で当選したのは、ライオン宰相・浜口雄幸である。大西正幹の息子・大西正男は、後に郵政相を務めた。昭和2年7月15日銘「下ノ加江天満宮天災記念碑」、昭和4年1月銘「下ノ加江水害記念碑」（いずれも市指定文化財）の漢文調の格調高い碑文とその字を書している。これは大正9年（1920）8月15日に発生した豪雨災害により下ノ加江川下流域にて発生した土砂流失について触れている。その惨状と田畑荒廃を地域住民が力を合わせ、耕地整理組合を結成し、昭和初めに見事に復興させたことを顕彰する石碑である（註6）。



引用・参考文献

- ・足羽潔ほか『高知・ふるさとの先人』高知新聞社、1992年。
- ・『土佐清水市史下巻』土佐清水市、1980年。

註

- (註1) 足羽潔ほか『高知・ふるさとの先人』高知新聞社、1992年、370—371頁。
 (註2) 前田和男ほか『高知県人名辞典新版』高知新聞社、1999年、916頁。
 (註3) 山下隆「四. 教育」(『土佐清水市史下巻』土佐清水市、1980年、359—361)
 (註4) (註1)に同じ。
 (註5) (註1)に同じ。
 (註6) 田村公利編『土佐清水市域自然災害碑調査-郷土の先人たちからのメッセージ』ジオパーク推進協議会・土佐清水市危機管理課・土佐清水市生涯学習課市史編さん室、2020年。